



ゴオウ。病気の牛に発生した「胆石」。オーストラリア産を良品とする。

地球にやさしい天与の生薬

牛が作った 生薬牛黄

「この紋どころが目に入らぬか。」おなじみ水戸黄門のセリフであるが、あの印籠の前身は？と問われたら、強心、解熱、気つけ、腹痛（仙痛）の妙薬として動物生薬が本体だろう、と答える。

動物生薬の中で一般的な牛黄（牛の胆石）、鹿茸（若シカの袋づの）などは広く知られているが、水蛭（縞蛭）、虻虫（アブ）となると「えーっ」と驚かれるだろう。しかし、田植えの経験をお持ちの方なら蛭の吸い付いたあとから、どくどくと血液が噴き出す異常さをご存じのはず。筆者は今でも夢に見る。

蛭やアブを加工した薬は今のところ許可になっていない

ので、もちろん市販の薬にはないが、古典の処方には漢方として載っていて、古代中国人は植物のほかにも、たくさん動物生薬を疾病に用いる発明をしてきたことがうかがえる。今回、代表格の牛黄を取り上げてみる。

牛黄は、病気の牛に発生した「胆石」と考えてよい。おそらくは、放牧中に異物を食べ、消化管に傷がつき、その傷を治すため自ら作った「疾病治療剤」であろう。

オーストラリア産を良品とし、南米、カナダ産がこれに次ぐ。日本の牛にはほとんどできない。純金より高価な物で、市場の常として「二七牛黄」が出回る。一回の量が百ミリとか二百ミリと、ごくごく微量で有効。ただし、体調のよい人には全く有効性は期待できない。

長年牛黄や牛黄製剤（他の生薬と混ぜた物）を用いてみて、牛黄一味だけでこれだけ有効なのは「なぜ」という思いを持ち続けてきたが、最近、京都府立医大第三内科の実験データを入手して、長年の疑問

が解けつつある。

牛黄の薬能、薬理をあげると「解熱、強壮、強心、血小板凝集抑制、抗セロトニン作用、利胆、肝臓保護作用」等々多彩である。その根底にあるのは「静脈の血流をよくする。肝血流を顕著によくする作用」である。

天然資源は有限である。原料動物の飼育、ワシントン条約などのハードルはあるが、いずれ解決の方向に向かう。これら天与の生薬は、地球を汚すことなく生産され、正しく用いることにより、高価なことを除けばすばらしい効果を期待できる。